

『血脇守之助の歯科医学概論』*

森 山 徳 長**

要 旨

50年間にわたり高山・東京歯科医学院、東京歯科医学専門学校の学校経営に全力をつくした血脇守之助の歯科医学概論の出発点を、カリキュラムに的をしづけてくわしく述べた。彼の足跡は、それ自身が、草創期日本歯科医学のカリキュラム編成の生みの苦しみと、成長の歴史であった。

This article described in detail the organization of dental curriculum which consisted the starting point of the orientation of dentistry worked out by Dr. Morinosuke Chiwaki who had devoted his life to the management of the Takayama and Tokyo Dental College for as long as fifty years. His footprint itself was the history of the labor of birth and development of the curricula of the early Japanese dentistry.

(キーワーズ Key words)

歯科医学概論 Orientation in Dentistry, 血脇守之助 Morinosuke Chiwaki

I はしがき

本論文は現在100年の歴史を誇る東京歯科大学

* Symposium—In Search for the Roots of the Orientation in Dentistry. “The Orientation in Dentistry thought about by Dr. Morinosuke Chiwaki of the Tokyo Dental College”

** Norinaga MORIYAMA, Tokyo Dental College
東京歯科大学

本稿の要旨は第18回日本歯科医史学会総会及び学術大会シンポジウム（1990年9月29日、於日本大学会館）で、シンポジストの一人として口演した。

の前身、高山歯科医学院幹事時代の、血脇守之助の歯科教育学科課程に対する考え方を出発点とし、東京歯科医学院々長となった血脇が、歯科医学教育カリキュラムを、どのように編成しようとしたかを中心に述べようとするものである。

記述の都合上先ず1) 歯科医学概論の定義と範囲、2) 学校経営者としての血脇守之助の経歴、3) 高山歯科医学院講師・幹事時代、4) 東京歯科医学院長時代、5) 明治30年代後半のカリキュラム論争、6) 東京歯科医学専門学校時代の順序で述べる。本シンポジウムの趣旨は、歯科医育の開拓者の考え方を史料的にまとめ、さぐることにある。そこで1947年の歯科教授要綱にある歯科医学概論の内容のうち、その(2)学習の順序、すなわちカリキュラムに的をしづって論述を進めることとした。歯科医学概論の中心は学科課程であるとするのが本稿筆者の理念である。

II 歯科医学概論の定義・範囲

Orientation in Dentistry が、字義の通り「歯科医学の進むべき方向を示し原理・目的等に対する態度を確定すること」であるとすれば、明治初・中期の orientation は、まさしく東の方向から海を渡って来た米国歯科医学に対し、東面していたといえる。その範囲も当然米国歯科医学のそれであった。血脇が医術開業歯科試験に合格し、高山歯科医学院幹事兼講師に就任した明治28年(1895)頃は、米国においても歯科の各科目が細分化する、発展と分化の時代であった。高山の意を体してスタートした血脇の「概論」はそれに対応して進化の歩みを開始したのである(図1)。

この時点の歯科医育機関は、ほかには愛知歯科



図 1 東京歯科医学院創立時 30 歳頃の血脇守之助 肖像

Fig. 1 Portrait of Dr. Morinosuke Chiwaki, ca 30 years of age, when he started the Tokyo Dental College

医学校しかなく、わが国の歯科教育はいわば暗中模索の状況であった。

III 学校経営者としての血脇守之助の経歴

明治3年生れの血脇は幼くして漢籍に通じ、当時一世を風靡していた英学を明治学院その他に学び、結局慶應義塾を卒業し、新聞記者として社会にデビューした。さらに中学校の英語教師を経て、明治26年春高山歯科医学院に入学した。入学して早々のこと、院長の外遊に際し、院長の米国での演説原稿の英訳を短時日で完成して信任を得、学生の身で学院の幹事見習となった。そして2年後、医術開業歯科試験に合格して正式に教職者となり、高山歯科医学院の実質的な番頭役をつとめた。その弁舌、文章の才は万人の認める所で、学院機関誌歯科医学叢談を創刊、主筆をつとめた。

その後高山院長から学院を譲り受け、東京歯科医学院を設立して、血脇の自前の orientation は始まったのである。

東京歯科医学院長として明治33年より7年半、東京歯科医学専門学校長として明治40年から昭和18年奥村鶴吉に校長職を譲るまで38年、名誉校長となり大学昇格をその目で見て天寿を全うした昭和22年までの4年を加えて計50年の間、血脇は歯科医育機関の長であった。その生涯は歯科医学概論の創始者であり、推進者であり、完成者であったといえる¹⁾。

IV 高山歯科医学院講師・幹事時代

高山紀斎の高い理想は、現実の壁にはばまれて大変な困難の中に進められた。血脇が免許に合格し正式に幹事と教職となって、院長に具申した血脇の建議により、学校としての体制は学院の卒業試験の実施、院友会の発足、歯科医学叢談の発刊等によって大いに整備された。

このように、歯科医士（当時の呼称）となって間もない血脇は、弁舌家、文章家として歯科界に早くも頭角をあらわしていた。折しも医術開業歯科試験規則の改訂の噂が巷に流れるや、血脇は直ちに筆を執って叢談に一文を投じた。曰く

『試験規則改正の風説を耳にする——天籟生』

彼の論旨は現行（明治17年施行）歯科試験規則の試験科目は、第1 歯科解剖及生理、第2 歯科病理及治術、第3 歯科用薬品、第4 歯科用器械、第5 実地試験の5科となっている。「規則制定の当時は歯科の程度甚だ揚らず従つて試験科目を高尚にすれば登第者跡を絶つの憂あり已むなく歯科解剖及生理とか歯科用薬品とか極めて簡易なる課題の下に局所試験を行いつつありしが今日に至りては歯科の進歩著しく、問題も亦往日の程度にあらず……」そして当時の普通医試験科目との比較を論じて、「隔靴搔痒」「歯科の品位を墜すこと果して幾何ぞ」という具合に論旨を展開し、学科の名称を以下のように改正しなければならないと提案する。すなわち、下記の如き改称案を示し、出題方法についても意見を付している。

従来名題

改題私見

歯科解剖及生理……………解剖学

生理学

歯科病理及治術……………歯科病理学

歯科外科学

歯科用薬品 歯科薬物学
歯科用器械 歯科補缺学

血脇の狙いは、医士試験にくらべ遜色の明らかな歯科試験科目の合理化とレベルアップを計る、理路整然たるものであった。

なお、歯科補缺学は在来歯科器械と慣用されているが、義歯補缺の術を論ずる学なのでこの名称が適當と信ずると書いている²⁾。

事実その後、叢談の抄録欄で、『歯科補缺術問答』と題してカリフォルニア大学歯科部の Charles Boxton の問答形式の論文訳を4回にわたって連載した³⁾。(この分野の器械学から補綴学までの名称変遷の道程については別論文に詳報する予定である。)

なお前述の論説で、血脇は「当時受験には医士2名の保証状が必要とされていたものを、歯科医士の保証で足りるよう改正すべき」と説き、陳情に奔走し、この提案の主旨を実現している。

このように高山歯科医学院後半数年で、血脇の果した役割りは大きかった。この時期は血脇の歯科医学概論の萌芽期といえる。

V 東京歯科医学院長時代の歯科医学概論

高山紀斎から学院の名儀のみを引継いだ徒手空拳の血脇は、東京歯科医学院発足の当初、高山歯科医学院講義録にならって先ず講義録を発行することとした。この時期は自前の歯科医学概論の生みの苦しみと産婆役の時代であったといえる^{4),5)}。

この講義録の高山歯科医学院時代との違いは、基礎医学と臨床歯科医学の教科を画然と分ったことである。みづから執筆した歯科治術学で、血脇は歯科医学の方向と教科目の分類について、次のようにその考え方を述べている⁶⁾。

『先ず米国における学課目を見ると、解剖学、生理学、歯科病理学及療法、歯科組織学並に歯科手術学、歯科器械学、外科学、化学、薬物学、歯科法医学等である。成書も大ていはこの区別に従って書いてある。病理書でも手術書でも、開巻第一に解剖組織の講釈があり、全く蛇足に過ぎない。実用一点張りの米国では怪しむに足りない

が、日本人の目から見るとおかしく思われる。私の理想からいえば、純粋な歯科学は以下の様に分類するのが至当である。

①歯科解剖学、②歯科組織学、③歯科生理学、④歯菌学、⑤歯科病理学、⑥歯科薬物学、⑦歯科治術学、⑧歯科器械学、⑨歯冠継続術、⑩歯冠架工術、⑪歯列矯正術、⑫歯科法医学

日本において確たる決まりは無いが、医術開業歯科試験は①歯科解剖②歯科生理③歯科薬品④歯科病理⑤歯科治術⑥歯科器械となっており、学の字を省略したのは制定当時の事情で已むを得ないとしても、区別はまあこんなものであろう。ただし実施にあたっては米国流の間違った解釈で出題されているのはなげかわしい。(大意)』血脇はこの考えにそってカリキュラムを育てていった。

前項でも述べたことではあるが、血脇は米国流直輸入のカリキュラムが気に入らなかったようである。ただし、米国内自体が急速に変化しつつあったことも、またたしかであった。

血脇はまずとりあえず自分の考えに従って編集した東京歯科医学院講義録(明33.3~34.6、筆者はこれを第一集と呼ぶ)が完結するや直ちに、新たに教授陣に迎えた米国帰りの佐藤運雄 D.D.S., M.D. や早川可美良、水野寛爾らの新進の卒業生を執筆陣に加えて「歯科医学講義」(第2集、明35.4~37.12)をスタートさせる。ここでも血脇は治術学を執筆し、「治療学と手術学を合せたものが治術学」と定義する⁷⁾。学院も自前の校舎を持つようになり、院外生も増加して数年の間に4万部以上の講義録が発行された。これらに盛られたカリキュラムで、血脇の歯科医学概論は一応の形を整えたといえる。

VI 明治30年代後半のカリキュラム論争

明治36—7年頃は、歯科ジャーナリズムでのカリキュラムの論評がにぎやかな時代であった。そして、その素地として3つの要素があったと筆者は考える。

第1は医師法制定問題に端を発して、歯科医の業権拡張のための全国的大同団結が至上命令となつた社会的背景である。

表 1 伊沢信平私案による 1) 歯科医学の分類と、2) 4年制カリキュラム

Table 1 The Classification of Dental Science (1) and 4-year System Curricula of Dental Schools by Dr. Shinpei Izawa (2)

入學第四年		入學第三年		入學第二年		入學第一年		講外	歯科醫學	歯科工學	歯科準備學	第一表	歯科準備學
實 口口亂齒	菌齒	實 齒口齒	菌齒	實 齒科	菌齒	實 組生解化物		病外歯	口口菌齒	菌齒亂齒	組南菌生解化物		
腔腔排	科科科	科腔科科科	科生	科科科科科	科科	機理剖理		理科	腔腔科科	科科衛科	科生解化物		
微外矯	病器手	藥外病器手	變理	物理金械術	器手	地學學學學		總法	微生物	衛手	衛理理剖理		
地學學學	(先者治) 地學學學	物科理械術	胎生	地學學學學	學	地學學學學		論論學	學學學學	械正術	胎生學學		
(先者治) 地學學學	全完全 結	完完完 結	完完完 結	完完完 結	完完完 結	分分分全全 課課課			分分分全全 課課課	完完完 結	學學學學	(一況及歯科專門)	
口腔器 腔外科 手術	(先者治) 地學學學	先項器 地學學學	先項器 地學學學	先項器 地學學學	先項器 地學學學	先項器 地學學學			分分分全全 課課課	完完完 結	學學學學	(無機及 有機)	

その2は、高山紀斎や伊沢信平のように、米国で歯科医となつ有力者が、米国における教育制度の紹介を行ったことである。

第3には、帝国大学を頂点とした学制の見直しと改革により、専門学校令が新たに発布されたことである。専門学校令にもとづく程度の歯科医学教育カリキュラムは、どうあるべきかに当然関心が集まっていた。

血脇は、歯科医の全国組織作りの大切なことを十二分に知っていたので、歯科医師法制定を目標に、その医政力を發揮し奔走した。その一つの礎石となった、明治36年4月1日大阪で開かれた「日本歯科医師大会」は大成功であったが、その翌日の学術講演会で、伊沢信平は『歯科学究方針私議』と題し、教育カリキュラム問題を論じた。その分類の結論は表1に示すように、準備学、工学と医学に分つもので、これを教授する課程は1~4学年にわたっていた⁸⁾。その内容は高山紀斎が高山歯科医学院認可願に提出した最初のカリキュラム⁹⁾と非常によく似ているが、2人の経験を考えればむしろ当然のことである。

次いで明治37年になると、医師法制定問題にからむ川上元治郎と血脇の論争¹⁰⁾に端を発して、何人かの論客によって、医科と歯科の一元・二元論、分類論争が展開された。

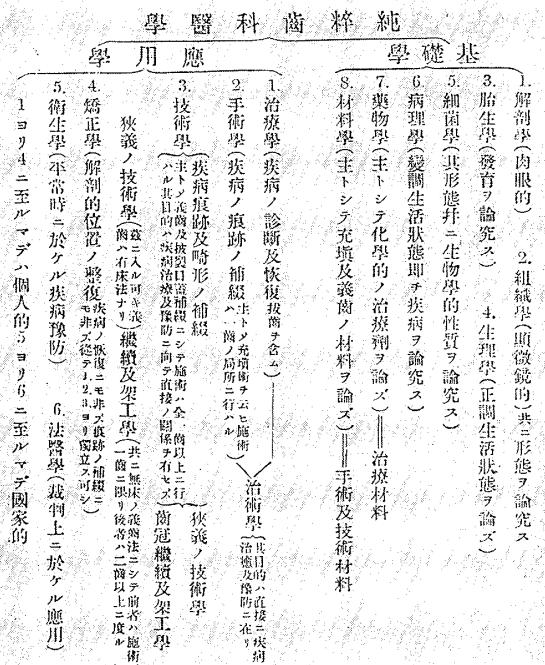
この論戦の代表選手は、共に東京歯科医学院講師で、気鋭な奥村鶴吉と、M.D. と D.D.S. を持つ新帰朝の佐藤運雄であった。

奥村は歯科医学は独立して、歯科基礎学と臨床応用学に分つ二元論（表2），佐藤は口腔科学という守備範囲を作る一元論的な（表3）カリキュラムを立てる考え方を示した。そして、それぞれの論旨を批評し、自説をさらに解説して、歯科学報9巻4~7号の誌面を飾った。これは、9巻3号に遠山椿吉が「医術の本義について」と題した20頁の論説を受けて、まず奥村が4号に書き、続いて5号に佐藤が書き、さらにそれぞれの続編となつたのである^{11~15)}。

その他に、8号に大伴直守も16頁の論説を書き¹⁶⁾、また米国シカゴ歯科医学における、プライン（一元論）とローガン（二元論）の対立する意見の訳が12号に載った¹⁷⁾。

表 2 奥村鶴吉の純粹歯科医学カリキュラムの分類

Table 2 Dr. Tsurukichi Okumura's Classification of Curricula of Genuine Dentistry



以上は当時の歯科界の様相を浮彫にするものであった。やがて明治39年には歯科医師法が医師法とは別にしかも同時に制定され、法的にも制度的にも、二元論に決着するのである。

血脇は専門学校昇格への布石として、37年夏奥村をペンシルバニア大学へ留学させ、38年から学制を2年半、さらに39年には3年制とした。

VII 東京歯科医学専門学校校長時代

明治39年8月帰朝した奥村は、直ちに学院幹事に任命された。そして奥村が中心となり、佐藤、早川、水野、花沢、川上ら諸教授とともに、専門学校昇格にかなうカリキュラム編成と、教育内容の充実のために全力を尽した。

翌明治40年9月12日、待望の認可が下りた。東京歯科医学専門学校は大正2年より半年の予科を設置、大正8年には4年制に年限を延長した。そのようにして血脇とそのスタッフは、大正9年(1920)財団法人化を行った時点で、臨床実習1ヶ年半を組込んだ現行の専門課程カリキュラム

表 3 佐藤運雄の所謂歯科医学のカリキュラム分類

Table 3 Dr. Kazuo Sato's Classification of Curricula of the so-called Dentistry i.e. Stomatological Science



をほぼ完成した¹⁸⁾。

法人化して拡張を計った校舎整備計画は、関東大震災によって一頓座した。しかし、その困難を乗り越え、昭和4年東洋一を誇る立派な歯科医学の殿堂を完成した。その後の10年は最も校勢の充実した時代で、昭和15年、開校50周年記念式典の時点のカリキュラムは、100周年を迎えた現在とほとんど遜色のない内容となっている¹⁹⁾。

VIII む す び

血脇守之助は歯科界に身を投じて以来、理想にすぐれた高山の建学の精神実現のため、高山歯科医学院、東京歯科医学院、東京歯科医学専門学校の各時代を通じて、学制、教授陣、教科書の充実に努力を傾注した。

血脇の歯科医学概論、すなわちカリキュラム論は東京歯科医学院創設時代にルーツがあり、高山の建学後30年に及んで、その理想としたカリキュラムを実現した。さらに財団法人化により日本歯科

界をリードする現東京歯科大学の基礎を作った。本論文ではその経過をそのルーツを主に概説した。以上の発展は具体的には、講義録、教科書の発達という形で実現されたことが、比較書誌学的見地から鳥瞰できる²⁰⁾。

参考文献

- 1) 松宮誠一（血脇守之助伝編集委員会）編：血脇守之助伝。学校法人東京歯科大学、昭和54年2月24日。
- 2) 血脇守之助（天籟）：試験規則改正の風説を耳にする。歯科医学叢談9号（2巻4号）明治30年7月。
- 3) 血脇守之助：歯科補缺術問答1～4。歯科医学叢談6～9号（2巻1～4号），明治30年1, 3, 5, 7月。
- 4) 長谷川正康・森山徳長・石川達也・高添一郎：東京歯科医学院の学制・教授陣・教科書等について。日本歯科医史学会々誌，14(2): 89～96，昭和62年12月。
- 5) 森山徳長・石川達也・長谷川正康：東京歯科医学院講義録（第一輯）の書誌学。日本歯科医史学会々誌，14(2): 97～101，昭和62年12月。
- 6) 血脇守之助：「歯科治術学」，東京歯科医学院講義録第一輯，第一号明治33年3月25日発行。
- 7) 血脇守之助：「歯科治術学」東京歯科医学院講義録第二輯「歯科医学講義」（合本），明治39年11月。
- 8) 伊沢信平：歯科学攻究方針私議。大日本歯科医師大会記事，60～65頁，明治36年4月1日。
- 9) 血脇守之助：高山歯科医学院の過去並現在ノ状況。高山歯科医学院，東京，明治28年5月。
- 10) Op. cit. 1) pp. 68～70.
- 11) 遠山椿吉：医術の本義について。歯科学報，9巻3号1～12頁，明治37年3月。
- 12) 奥村鶴吉：歯科医術及医学の本義并ニ分科ニ就テ。歯科学報，9巻4号1～6頁，明治37年4月。
- 13) 佐藤運雄：「所謂歯科医学」ノ名称及分類ニ就テ。歯科学報，9巻5号11～20頁，明治37年5月。
- 14) 奥村鶴吉：再ビ歯科医学ノ意義及其分科ニ就テ。歯科学報，9巻6号1～7頁，明治37年6月。
- 15) 佐藤運雄：再ビ所謂歯科医学ノ名称及分類ニ就テ。歯科学報，9巻7号1～7頁，明治37年7月。
- 16) 大伴直守：歯科医学ニ於ケル疑議管見。歯科学報，9巻8号，6～21頁，明治37年8月。
- 17) a) C.P. プライン氏述：歯科ハ医科ノ一分科ナルヲ論ス。10～15頁，b) ローガン氏述：歯科ハ医科ノ分科ナラス。15～23頁，歯科学報，9巻12号，明治37年12月。
- 18) 長谷川正康・森山徳長・石川達也・高添一郎・金竹哲也：東京歯科医学専門学校の学制・教授陣・教科書等について（その一）。日本歯科医史学会々誌，17(2): 89～96，1991年2月。
- 19) 東京歯科医学専門学校編：昭和15年度入学要綱。昭和15年3月。
- 20) 森山徳長・石川達也・長谷川正康：明治期歯科医学書の比較書誌学的研究。日本歯科医史学会々誌，17(1): 59～63，1990年9月。